

キャンパスの学友諸君ノ「全共闘」は、無念にも「立命解放」という旗印をおろさなければならぬ。

この記録と総括(次篇)の刊行は、葬ったはずの過去の権力の現在の権力への延命を断たんとする刃となろう。

立命館民主主義の体制化を批判した唯一の主体、大学が変わりうるという可能性を切り拓いたはずの無二の革新主体たる全共闘は家父長(武蔵理事長)と親族(キャンパスの学友諸君)に認知されない私生児のようだ。貧しく傷ついた子は、あるいは幸せな家庭を築いているかもしれない父親に、すてられ、失意のうちにある母親に会うことをとめ、涙をつづけている。

自分が、この世の中で果たしている役割を知ることはいつらなことである。しかし、人は燃え尽きえらびもなく、試行錯誤のくやしきもないような人生をおくってはならない。法学部闘争委員会は、全共闘のいのちあるかたの一切を継承し、人間と真理への冒険者、代々木、武蔵理事長を諷め、正義を発動させる闘いに決起することを言明する。永い亡命を終え、全ての闘う学友との熱い相互変革の過程へ入る可能性を現実化することを提起し、法学部闘争委員会は、この記録が、自警団を打倒し、被害者意識とスネオの館を爆破する新たな闘いの昂揚とともに、広く問われることを熱望している。

六月安保闘争の前進を目のあたりにして。

法学部闘争委員長

天野博

一、発端／学園新聞社襲撃事件

現在にいたる立命館大学全共闘運動のそも／＼の発端となった、学友会執行部に拠る民青の学園新聞社(中央委員会を構成する文化サークル)への権力的介入は、自立した文化運動への政治的介入(暴力をとらう)といった問題からサークル団体の総反発を招いたということにとどまらず、42年の学友会執行部の承襲以来、短時日にして全学一元支配へむかってきた代々木スーリニストへの醜悪の感情に火をつけ、大衆・群像の下意識のガソリンに引火させる。

学園新聞社の民主化を口実とする民青の介入は、彼らのその目的を挫折させることになるばかりか、逆に彼らが營々として築きあげてきた代々木系大衆運動と「全学一元支配」を根柢から動揺させ、自らが依拠する「立命館民主主義体制」に回生しがたい打撃を与える結果となってしまう。

13日の金曜日にはじまる激動の一週間が、大学の日常性の進行を止め、クラス討議、ピラ、大字報、あいつく校庭集会をうみだしここにわかるように、この事件を契機に代々木スーリニストの「全学一元支配」の下でうきまきさせられてきたエボルギーが、存心館を占拠する民青派学生という具体的な対象を得て、いわば「全学一元支配」完結化前夜という危機感とともに、一挙に爆発的に解き放たれる。立命館大学全学共闘会準備会の結成が提起されたのはこの時期—12月13日の学友会・民青幹部集会においてであった。

準備会全共闘は、代々木の攻勢に身がまえる学生革命派の真剣な防衛の意識にうらづけられる反民連合であり、こうした誕生の経過は、初期全共闘が立命館民主主義体制へ迫る問題意識を高次化できず、長い間さらなる矛盾の切開けむけての全学闘争を組織する知的・モニーをもつことができないでいた理由である。にもかかわらず、学友会執行部は民青を弾劾する広範な学友を、日大、東大闘争の昂揚を背景に、全共闘(準)に結びつけ、批判の鋒先を政治集団「民青

をこえて、立命館民主主義と総称される体制の深部へ、現行大学の矛盾へ鋭く突き進めさせたものは「いつも後手にまわる、いやいや中途半端な譲歩、首謀者を孤立させようというあやふやなこころみ、騒ぎが起これば扇動家のせいにし、紛争を一部不穏分子の仕業とするような無理難題」、理事会、教授会のケレンスキー主義のおかげである。末川総長を継いで事実上の総長の事務を代行していた天野教授は、全共闘という怪物におびえる代々木系と非代々木系右派担理事は、ケレンスキーの役わりを、つばにはたしつづける。天野法学部教授のケレンスキーよりは、のちのちふれていくことにしよう。

学園新聞社事件の意外な進展とその深刻さに気づいた五者共闘会議とその中絶、教職員組合は、立命館民主主義の諸機構とその幻想を巧みに利用しながら早急の収拾を懸命にはかろうとする。ヒステリックに教職員は「大学の自治」をふりまわし、自治を破壊する暴力集団(全共闘)を非難し、立命館民主主義を守れ、とキャンベールする。だが、彼らがそうすればそうするほど、立命館民主主義の下で久しく陰謀され、内向させられてきた矛盾を露わにし、やがて立命館民主主義の荒廃した内実を白日の下にさらけだす。あらゆるかたの幻想をぬぐい去った学友が立命館民主主義にかいまみだのは、大学の自治「学園自治」教授会自治という結合関係の中の権威と制度の内側でくりひろげられるかけひきと露骨、日大、東大闘争の展開において、全共闘によって鋭く告発させられてきたものと同様のものではなかった。他ならぬ第一期学園闘争を右翼との必死の闘いのなかから勝利的に完了したこの立命館大学においてである。

62年、63年学園闘争の中途半端な終末以来ひきつらされてきた第二期学園闘争しめくりは、革命機関「全共闘」が結着の暴力とともにあらわれるのをまたねばならなかった。

ここで、67年以降の代々木系の急速な膨張肥大と、それに抗する途なく後退を強う他なかつた新左翼諸派の動きによれておきた。

67年の代議員選挙は、60年安保以来、統社同一フロント(社学連)の不動の拠点とされる立命館学友会運動の指導権を、民青「全学連」に移した。66年まで、二部学友会を除く、四自治会、中央委員会を構成する独立事業団体、学術、学芸の各運動の中心に反代々木系諸派がいるという立命館学友会運動の勢力分布が、67年にがらりと変わり、67年から68年におよぶ日本学生運動のはげしいかまりと、横目でにらみながら、代々木・民青は、文自執行部の無力化、理工自治会の政権交代、経自の二重執行部の民青系への解消、そして生協の指導権の承襲によって、さらに強大な支配をしいていく。こうした変化は、京都のもつ政治風土を考えてみれば、力量ある民青にとて選すぎた案と見える。上昇気流にある民青が、その組織をあげて「マンモス私大(立命館)の民主化」をはかろうとしたのは当然であって、当時、赤旗に掲げられた同盟文では、67年の変化の重大な焦点である経自民主化へむけて百万をこえる教職員のカンパをうけたと述べている。星宮氏(青年インターの創立者)を全学連副委員長におくった57年以来、一貫して革共同潮流の影響から離れたことのない経済学部自治会の中核派執行部は、民青の全京都職員(京大同学会委員長の陣頭指揮)によく対え、一年にわたって二つの学生大会、二つの自治委員会、二つの執行部という対峙をつづけるが、経済学部教授会の妨害と擾乱をうけ敗北した。

67年の屈曲と変貌の最大の理由は、諸派(中絶、ブント民学同左派)の内外協力をうけながらも、学友会運動を執行してきたフロントが、65年日韓闘争以後の闘いのあり方をめぐる低迷のなかで役わりを終えねばならなかったという点にある。「平和と民主主義を守り、よりよき学園生活をめざす」第二期学園闘争の実践、理論両面にわたる数多くの貢献をなしてきた林造改革派は、日韓以後、新しい段階に入った日本資本主義に直面して、早いテンポで後退しは